

彙報

第一一回總會および研究集会

木簡学会第一一回總會と研究集会は一九八九年二月二日、三日の両日にわたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一五〇名の参加者をえて開催された。会場には平城京の二条大路木簡、滋賀県の西河原森ノ内遺跡出土木簡などが展示され、会員の関心をよんだ。

◇二月二日(土)(午後一時—五時)

第一一回總會(議長 鈴木靖民氏)

最初に平野邦雄会長の挨拶があり、つづいて議長を選出して議事に入った。

会務・編集報告(鬼頭清明委員)

今年度の新入会者は二三名、退会者一名あり、会員数は二五七名となっていること、会員増によって今後の会の運営について再検討の時期にきていること、会誌一一号の編集経過、頒価を前号同様に(三八〇〇円 送料四〇〇円)決定したこと、編集実務の負担が大きいくそのあり方についても検討すべきであることなどが報告された。

会計報告(綾村宏委員)

一九八八年度の収支報告があり、ひきつづいて田中稔監事から長山泰孝監事とともに監査を行い、会計の執行が適正に行われていることを確認した旨の報告があった。

一〇周年記念出版について(鬼頭清明委員)

記念出版の『日本古代木簡選』の編集経過説明と、それにもなう特別予算の執行状況についての報告があった。

木簡データベースについて(田中琢委員)

奈良国立文化財研究所で進めている同データベースの公開体制が整備されてきたので、利用方法等を検討し会員からも意見を求めたい旨の説明があった。

以上の案件に関して、討議が行われ、議案は承認された。

研究集会(司会 和田萃氏)

木簡研究の歩みと課題

佐藤 信氏

西河原森ノ内遺跡の地理的・歴史的環境

辻 広志氏

西河原森ノ内遺跡出土の木簡について

山尾幸久氏

佐藤報告は、木簡研究史をたどりながら、合わせて木簡学会の一〇年を振り返り、さらに今後の研究課題を提示したもので、その内容は『日本古代木簡選』に掲載される。佐藤報告に関連して、平川南・倉住靖彦・東野治之・今泉隆雄の各氏よりコメントがなされた。辻報告は、一九八五年以来七世紀末から八世紀初の木簡が出土し

て注目を集めている西河原森ノ内遺跡について、発掘の概要と遺跡立地の環境についてスライド等を使いながら説明があった。

辻報告に引きつづいて、同遺跡出土の木簡について山尾報告が行われた。その内容は本誌に掲載できた。

◇二月三日(日)(午前九時―午後三時)

研究集会(司会 吉田孝氏・鬼頭清明氏・佐藤宗諄氏)

一九八九年出土木簡の概要

森 公章氏

平城京東二坊二条大路出土木簡

渡辺晃宏氏

長岡京左京一条三坊六町・十一町出土の木簡

百瀬正恒氏

森報告は、一九八九年に全国で木簡が出土した三六の遺跡について、木簡出土遺構と木簡の概要を述べたもので、その多くは本誌に掲載できた。

渡辺報告は、長屋王宅推定地の北に接する二条大路と左京二条二坊五坪の発掘成果及び出土木簡の報告であり、いわゆる「二条大路木簡」の内容についての解説が中心となった。参加者の大きな関心を呼び、特に左京二条二坊五坪の性格について議論が集中した。

百瀬報告は、一九八八年に発掘され四〇〇〇点近い木簡が出土した長岡京左京一条三坊六町・十一町の遺構と木簡の概要についてのもので、これも本誌に掲載したので参照されたい。

報告の後、渡辺報告に関連して平城京左京二条二坊三・四・五・六坪にあたるいわゆる「東院南方遺跡」について、その遺跡保存に

万全を期すべき旨の要望書を、木簡学会から関係機関に提出したいという提案が会長から示され、議論が交わされた。おおむね原案が認められ、文案等の修正・提出などについて会長以下委員会に一任されて、閉会した。

委員会報告

◇一九八九年二月二日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営について検討が行われた。また、「東院南方遺跡」保存に関する委員会提案についても話し合われた。

◇一九九〇年五月一八日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八九年度の会計報告、『木簡研究』第一二号の編集計画、大会の日程等について話し合われた。新たに清水みき・土橋誠・鷺森浩幸・鈴木景二の四氏に幹事を委嘱することとなった。また、一〇～十一月に川崎市市民ミュージアムで開催される「木簡展」について、木簡学会が協力すること、あわせて期間中に公開研究会を行うことが提案され、了承された。

◇一九九〇年一〇月二六日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九九〇年度の会計中間報告、『木簡研究』第一二号の編集状況、大会の日程等について検討され、川崎市市民ミュージアムで行われた公開研究会の報告がなされた。

公開研究会

◇一九九〇年一〇月一〇日(水)

於川崎市市民ミュージアム

木簡学会協力の「木簡展」にともない、川崎市市民ミュージアムと共催で公開研究会が「フォーラム古代東国と木簡」と題して開催された。当日は会員及び会員外の参加を得て約三〇〇名の参加者があった。基調報告は次の通りである。

相模の木簡

鈴木靖民氏

下野国府の木簡

加藤友康氏

行田市小敷田遺跡出土の木簡

宮滝交二氏

宮都出土の安房の木簡

佐藤 信氏

上野国分寺の文字瓦

前沢和之氏

石岡市鹿の子C遺跡出土の漆紙文書

平川 南氏

多摩ニュータウン№一〇七遺跡について

竹花宏之氏

一九八九年度大会で決議され、文化庁長官・奈良県知事・奈良市長宛に出した要望書の全文を掲げておく。

平城京出土木簡の保存・公開

及び平城宮東院南方遺跡の保存についての要望書

平城京左京三条二坊の西北四坪については、百貨店建設の事前調査として一九八六年以来、今春まで発掘調査が実施され、大量の長

屋王関係の木簡が出土しました。その結果、同地が長屋王邸と推定されたことは、すでに周知のとおりであります。また、その後の一連の調査結果では、長屋王邸の北方にあたる平城京二条大路の南辺と北辺で長大な土坑が発見され、そこから約五万点の木簡が出土しました。最近の奈良国立文化財研究所の発表では、木簡は、全体の四パーセント程度の解説結果だけでも、天皇に供する贄に関する荷札、聖武天皇の吉野行幸に関する木簡、皇后宮や、皇太夫人宮子、さらには、当時の政界の中枢にあった藤原麻呂(不比等の四男)にかかわる木簡など、天皇家、藤原氏に直接かわるものや、絵馬、中国風の建物の絵をかいた板など重要な史料であることが判明しました。

これらの木簡の内容は、従来の文献史料からは、まったく想像しえないような情報を多量に含むものであり、天平年間を中心とする奈良時代史全体についての再検討の必要を迫っております。

このようにみますと、先に出土した長屋王家の木簡とならんで、これらの木簡の十分な保存措置と速やかな調査と公開を行いうる組織の整備拡充が望まれます。

それだけではなく、木簡が平城宮東院南方遺跡の南辺で、異常なほど大量に出土を見たことは、同遺跡の性格を究明する手がかりをあたえています。東院南方遺跡は、あたかも平城宮の東南の一面を占めるような位置にあって、その立地からみて平城宮と一体の施設

が営まれていた地域と推定されてきました。今回の多量な木簡の発見は、この推定を強く裏づけたものといえましょう。

木簡学会としては、南に接する長屋王邸跡が破壊されたことについて、痛恨の思いを抱いています。同遺跡が長屋王邸であることが判明した時には、すでに工事が進行しており、保存の手の打ちようがなかったことは悔やんでもあまりあるものがあります。その北に接する平城宮東院南方遺跡とその周辺については、大型の百貨店の進出にともなう現状の変貌はすでに現実のものとなりつつあり、緊急に保存措置が構ぜられるべき地域と考えます。

わたくしたちはこのように検討した結果、左記の二点を関係機関に要望します。

一、長屋王家木簡や、今回の二条大路出土木簡の保存、整理、公開の体制を充実させること

二、東院南方遺跡の万全の保存措置をはかること

一九八九年二月三日

木簡学会

編集後記

本誌の編集は、創刊以来、佐藤宗諄氏と鬼頭清明氏を中心に進められてきたが、本年度から他の委員が一年交替で引きうけることになった。十年に余る両氏の御尽力に対し、会員諸氏とともに深く謝意を表したい。

さて今回編集担当となって、改めて痛感したのは、編集実務が奈文研のスタッフに極めて大きく依存していることである。とりわけ窓口となられた寺崎保広氏の奔走がなければ、本号の編集は成り立たなかった。機関誌とはいえ、二段組、二〇〇頁前後ともなれば、ヴォリュームは優に単行本に匹敵する。研究所への依存は、本誌の性格上やむをえないところもあるが、いつまでもこのままでよいとは思わず、会員諸氏の御理解のもとに、少しずつでも改めてゆく必要がある。

本号の編成は、ほぼ例年のとおりである。お忙しい中、快く御協力いただいた各地の発掘担当の方々に、厚く御礼申し上げます。また論文の方も、昨年の大会報告から山尾氏の論考をいただき、工藤・春名両氏の投稿二篇と合わせ、充実したものになった。本誌の論文は、これまで大会の講演や報告に基づくものが多く、日本史関係の投稿は概して少ない。若い読者も含め、積極的な投稿をお願いしたいと思う。

(東野治之)